きたと思います。今後現場に出たときにボランティアでの経験を活かし、実際の現場でもコミュニケーションを大切にしながら関係を築いていき、それを基に学習指導に生かしていきたいと思います。

学校ボランティア4年生
人間科学科　4年　松本大輝

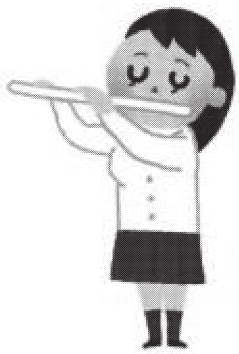
私は現在、学校ボランティアとして、毎週土曜日に戸塚中学校の土曜塾で活動を行っている。今年度、私は、主に3年生の女子生徒2人を担当している。彼女らは、毎週自分達が取り組みたい課題を持参して、多少しゃべりながらではあるが、楽しく学習している。私は、彼女たちの学習に取り組む姿勢を見て、その成長を感じるとともに、私自身の成長も感じた。

私は、大学1年次の春から現在に至るまで、戸塚中学校の土曜塾でボランティアとして活動してきた。活動を始めたばかりのころは、生徒との接し方、とりわけ生徒への注意の仕方、叱り方などに戸惑うことが多くあった。しかし、私がそのような悩みを相談できる場所があった。それは、同じボランティア先の先輩や、現在は「学校ボランティア演習」となった、月に一度開かれる学校ボランティア活動を行っている学生の報告の時間である。同じボランティア先の先輩は、実際に私が困っている現場も見ていたので、とても親身になって相談に乗って下さった。「学校ボランティア演習」の時間では、他のボランティア先で活動している先輩が、それまでの経験で私が悩んでいることに近い事例をとりあげ、その時の対処方法などを詳しく教えてくださった。多くのことを相談し、実践してきた分だけ、私は壁を乗り越え成長してきたのだと感じる。

私は、これまで、土曜塾の活動の中で生徒に取り組んでもらうプリントを作成してきたこともあったが、現在は、生徒自身の自分たちが取り組みたいものを持ってきてもらっている。なぜなら、生徒の自主性を大切にしたいからである。また、「自分は何を勉強するべきなのか」をしっかり生徒に考えてもらいたいからである。このことも、学校ボランティアの活動を行っていく中で学んだことである。

また、最近は、担当の生徒とボランティア先の後輩学生とのつながりも意識している。2年次や3年次で始めたばかりでは、不安なことも多いと思われるが、生徒と関わるうえで一番大切なのは信頼関係である。信頼関係を築くのは時間がかかる。しかし、私は、生徒と会話をするきっかけが少しでもあれば、生徒との距離がぐっと近くなると考えている。そのため、私は、担当の生徒に、「ここは○○さんの方が詳しいから聞いてみな」というように、他の学生ボランティアの名前を覚えてもらったり、会話をする機会につながったりするようにしている。このことは、生徒にとっても、多くのボランティアと関われる機会にもなる。生徒のコミュニケーション力の向上にもつながるのである。

私自身、まだまだ勉強していかなければいけないこともあるが、4年次となり、ある程度ボランティアでの経験も積んできた。今まで経験してきたものをなるべく多く、後輩に伝えていきながら、伝えるということによって、私の中でもこれまでの活動を整理し、自分自身のさらなる成長につなげていきたいと思う。



土曜塾レポート

現代ビジネス学科　3年
守山涼

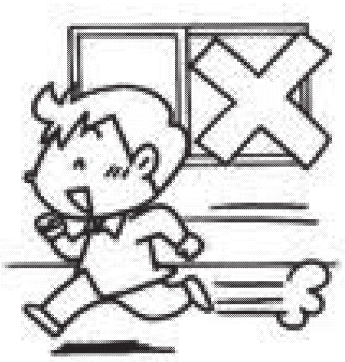
学校ボランティアを始めて、早一年半。私は、これまで色々な経験をして来ました。実際の教育現場（学校）で、生徒とのふれあいや個別に生徒と向き合い授業をしたこと、現役の先生方又、校長先生と会い「理想の教師像」について語り合ったことなどです。

そもそも教師になろうとしたきっかけは、中学校の社会の教師の影響からでした。社会という科目は、暗記科目として生徒はとらえがちで、中々「なぜ？」や、因果関係が非常に少ないと思われています。又、教科書だけに目が行ってしまい、比較的せまい視野でしか学べないのが多くある授業の形態ですが、私が当時社会を教えてもらった先生は、外に出て実際に調べて、いわゆる、フィルド・ワークを通じて生徒達に興味を持たせるように授業をしてくれました。そういった出来事があり、影響を受けたのです。

授業というのは、一方向ではなく生徒の意見を反映する、これが特に社会では重要だと感じます。実際ボランティアに行った時にはこのことを生かして授業をしています。例えば、私は英語と数学を教えているのですが、生徒の興味を引きつける為に、英語ならば世界の文化・歴史を所々に混ぜ、数学は分野によりますが、図形関連だったら、実際に図を書いて説明することをしています。こういった工夫が生徒たちの興味を引きつけるのです。生徒の「あ、っそうか！」という閃きで生徒の心理は、もっと学びたいという思いが芽生えてくると思います。又、勉強面だけでなく生活面や、部活の話しをしています。

生徒の名前を覚え、実際に授業のなかで「~さん」と呼ぶことで、生徒が喜んで反応し、質問がしやすくするように心がけています。その積み重ねにより、生徒と自分の信頼感が高まってくるだろうと思います。又、全体の学習状況を一人一人丁寧に観察することも私は、重要だと思います。

「なぜ、こうなったか？」、この「なぜ？」を正解に導き出す為に、教える者は、どんな力が必要なのかこれから、日々の学校ボランティアのなかで、考えていけたらなと思います。



学校ボランティアで感じたこと

英語英文学科　2年
中谷智美

私は、毎週土曜日に戸塚中学校の土曜塾で学校ボランティアをしています。昨年の六月から学校ボランティアを始め、後期は学校ボランティアを通して自ら問題点を見つけ改善策を考えることを目標に活動を行っています。私が学校ボランティアの活動をする中で感じた主な課題は以下の二つです。

一つ目の課題は、担当している生徒がおとなしい性格なのでどのように接したらよいのか、どこまで理解できているかがしっかり把握できていないことです。私は、生徒の理解度がどのくらいなのかを教える側が分かっていないとそれぞれの生徒に合ったことができないと思うので、生徒とより関係を深めて生徒のことを理解することは大切なことだと考えています。そのためには、ただ教え方ばかりを考えるのではなく、生徒とコミュニケーションをとり信頼関係を築いていくことにも

着目する必要があると思います。前期の学校ボランティア演習の中でも生徒とコミュニケーションをとることはとても大切であるということを学んだので、積極的にコミュニケーションをとり、生徒が考えていることやわからないところを言いやすくなるようにしたいです。また、生徒が問題を解いている様子をよく見るようにして、そこから 生徒の理解度を把握できるようにしたいです。

二つ目の課題は、生徒が土曜塾にきて学習したいと思える場をつくれるように工夫することです。そのためには、限られた短い時間が生徒にとって楽しく、そしてためになるものでなければならないと思います。私は、今まで前もって何をするのかを考えずに、その場で内容を生徒と話し合って決めていたため、準備が不足しているところがあり、満足のいくものができていませんでした。これからは一つ一つの時間の終わりに次の週に何をしたいのかを生徒に聞いて次にする内容について自分で事前に考えてしっかりと準備をしてから学校ボランティアに臨みたいと思います。

私は学校ボランティアの活動を始めてから自分の教え方や、生徒との接し方など様々なことを考えるようになりました。これからも問題点や改善点を自分で見つけてよりよい改善策を見出すことができるようにしていきたいです。また、一緒に学校ボランティアをしている人たちの意見や考え方を聞いて活動内容を充実させたいと思います。

時間を大切に

英語英文学科　2年
馬場成美

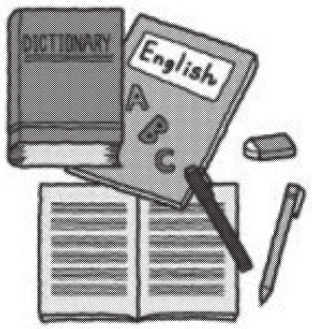
私がこの戸塚中学校の土曜塾のボランティアを始めて半年になろうとしています。ボランティアを始めたばかりのころは勉強の教え方、生徒とのコミュニケーションの取り方などわからないことばかりでした。現在は私が担当している生徒たちが気軽に話しかけてくれるということもあって、生徒とのコミュニケーションをとることはできるようになってきました。しかし、勉強を教えるという面から考えるとまだ課題はあります。

一つ目は生徒に聞かれたときにわからなかった時の対応です。私が担当しているのは数学ですが、数学以外にも理科を教えてほしいといわれることが多くあります。勉強を教えるときは嘘を教えてはいけないということが絶対条件です。自分たちが間違ったことを教えてしまえば生徒が間違って覚えてしまい、それを訂正するのは難しいことです。したがって自分の自信のないところ、わからないところは先輩に聞いたり、一度その問題を持って帰り考えてから次の週に教えるなどの対応をとっていきたいと思います。生徒に勉強を教えるということは責任のあることなので聞かれたその時に答えられなくても正しい答えを教えるということを大切にしていきたいと思います。

二つ目は時間を有効に使うためにボランティアの前に予習をするということです。土曜塾での学習の時間は1時間です。自分たちが考える時間を取ってしまうと生徒たちの学習時間が減ってしまいます。私が担当している生徒たちは前の週に次の週の学習内容を生徒たちに相談して決めるようにしています。したがって予習する箇所はわかっているのでできるだけ予習を行っていきたいと思います。また、生徒たちがどこでつまずくだろうか、どのように教えたら生徒たちがわかりやすいかなど勉強の工夫についても考えるようにしたいと思います。

私は生徒たちにはこの1時間という短い時間の中でたくさんのことを学んでほしいと思いま

す。私自身も教員を目指しているのでこのボランティアを通して学ぶことがたくさんあります。このボランティアを始めるまでは生徒に勉強を教えるという機会が全くなかったので良い経験になっています。これからもたくさんのことを吸収していき、その学んだことを将来に向けて活かしていければいいなと思います。土曜塾に来ている生徒にはわからなかったことがわかった、土曜塾に参加してよかったなど思ってもらえるような活動にしていけたらいいなと思います。



学校ボランティアを始めて

科目等履修生　垰　和徳

私は昨年の夏休み前から、戸塚高校定時制で学校ボランティアを始めました。

私がまず目標においたのは、「指導している生徒全員の名前を覚えること」である。それに対する取り組みとして、空いている時間に、生徒の名簿を見て、どの席に座っている生徒が誰かを確認することから始めた。語呂合わせなどを用意すると、うまく覚えられるという感覚をもった。

つぎに、目標においているのは、数学や英語の指導について「すぐ答えを教えるのではなく、徐々にヒントを出しながら生徒に気づかせ、それによって成長させる」というものである。九九を覚えている生徒に関しても、３ケタ×３ケタの計算のときには、途中で「8×5は？」「4×8は？」などと聞いたりしながら指導している。これによって、計算の手順を、自分で追えるようになるであろうと、考えている。また、九九を覚えていない生徒に対しては、とくに6の段以上の九九を確認したり、自分の覚えている九九が正しいかを確かめる方法などを教えたりしている。

また、まだ試してはいないが、「学校の勉強が何の役に立つのか」もところどころで教えたいと思っている。たとえば、理系に行かない人間でも、お金の計算など、簡単な計算というものは、仕事をする上において必ず必要になってくるものだということも、機会があれば教えたいと思う。英語も、仕事をするうえで英語の資料を読む機会があることも想像されるし、IT業界に就職した場合にも、必要になるであろう。

以上のようなことをふまえつつ、これからも誠実にボランティアにあたっていきたい。

ボランティアをはじめて

自治行政学科　1年
栗田佳苗

私は11月からボランティア活動を始めました。私が活動をさせていただいているのは戸塚高等学校定時制です。この学校は私が4年間の高校時代を過ごした学校です。初めての活動に行く前はとてもわくわくする反面、とても緊張していました。自分の知っている先生方が多いからこそ、全く成長していないと言われたらどうしよう、生徒に聞かれても自分がわからなかったらどうしよう、そんなことがずっと頭の中をぐるぐるめぐっていました。

当日、学校に向かう道や校舎や雰囲気は相変わらずで懐かしい感じがしました。学校に着いてからは在学中にお世話になった先生や担任だった先生とお話をして活動の流れなどの説明を受けましたが、ますます緊張する一方でした。教室に移動して授業が始まると、ボランティアの先輩や担当の先生方は生徒に近づき話しかけコミュニケーションをとっている中、私は少しの間その場で固まってしまいました。それまで生徒側として接してきた先生に対して「これがプロなのか」と実感した瞬間でした。そんな私にどう動くのか丁寧に教えてくださる先生や、「ボランティアの先輩を見て学べ」とおっしゃる先生もいて、自ら積極的に行動することが大切だということを忘れていた私は気がつかされました。また、わからないながらも一生懸命プリントに向かう生徒や友達と相談しながら取り組む生徒など様々で自分の1年生の頃を思い出しました。緊張しておどおどしていた私にも「先生丸付けして」と渡してくれることがとても嬉しかったです。中には集中力がもたずに携帯電話をいじってしまう生徒もいました。その生徒に対して注意したあとその後のフォローを欠かさない先生を見て、暖かく、ときに熱くなり生徒に対して一生懸命で柔軟な戸塚高校の先生方のような先生になりたいと改めて感じました。

まだ活動には１回しか行っていませんが、生徒にわかりやすく説明できるように考えながら自ら積極的に話しかけることを心がけ、周りの先生方の行動から吸収できることを吸収し、自分の経験と成長に繋げていきたいと思います。

発行日：２０１３年　２月１５日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室
TEL：０４５－４８１－５６６１（内線４２２８）
FAX：０４５－４１３－４１５４
E-mail：ttcr-yakohama@kanagawa-u.ac.jp
UPL:http://www.kanagawa-u.ac.jp/
teacher_training_course/jysp

ボランティア通信　～白幡小学校～

第1巻　第1号
発行日　2月 15日

目次

～白幡小学校・AT～ 「行事の意義について」 外国語学部 四年 藤原夏月	1
「アシスタント・ティーチャーと教育実習生」 人間科学部 四年 久保寺史織	2
「白幡小学校での活動を通して」 外国語学部 三年 田端真侑	3
「反省を生かして」 外国語学部 二年 阿部良美	3
～白幡小学校・土曜塾～ 「子どもたちをしっかり『見て』学ぶ」 外国語学部 三年 山本賢冶	4
「教職ボランティアを通して学びたいこと」 人間科学部 一年 河田直磨	4
「土曜塾で学んだこと」 人間科学部 一年 藤原達矢	5
「土曜塾での目標」 法学部 科目等履修生 沖野勇介	5
「学校ボランティアでの活動を振り返って」 人間科学部 三年 帰山詢平	6

行事の意義について

外国語学部　四年　藤原夏月

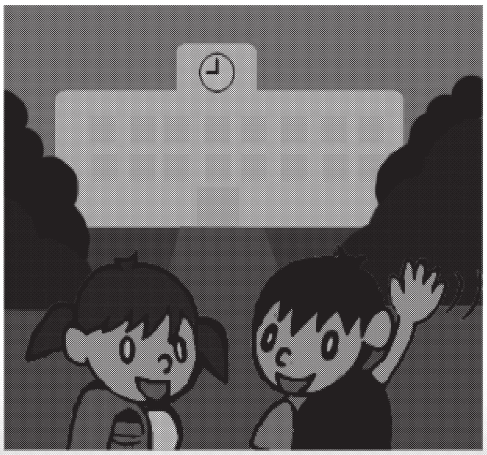
今年の9月末、白幡小学校では毎年の恒例行事である運動会が開かれました。今年は参加させて頂いて3年目ということで、特別支援級（5・6組）の子どもたちにとっての行事とはどのような意味があるのだろうと、いつもとは違うことを考えるようになりました。思い返せば昨年、一昨年と、子どもたちと運動会の練習を行う際に、「踊りが覚えられないから練習嫌い！」や「徒競走で1番になれないから嫌だ！」というような声が多く上がっていたように思います。もちろん普通級の子どもの中にもそう思っている子は少なくないと思います。しかし、感情のコントロールが難しく、集団の中に入ることが苦手な子が多い5・6組の子どもたちに掛かる負担は、一般級のそれとは度合いが異なります。特別支援学校の中には子どもの安定を第一に考え、ストレスが掛かる運動会や文化祭といった行事を行わない学校もあるそうです。それなのに一般級の子ども向きに作られた演技を覚えることは、安定を考えなければならない特別支援教育には相反し、不安定な状態に陥るのでは、と自分の中で行事の意味について疑問が生まれるようになりました。

先に挙げたように、「1番になれないから嫌だ。」という不満は毎年上がっています。そこで、先生方は生活の時間を使い、事前指導を行いました。徒競走で1番になれなかった時、どんな風に過ごせばいいのか、短い劇仕立てで子どもたちの前で実践して見せたのです。「1番になれなかったら、『1番じゃないからもう嫌だ！詰まらない！』と怒るのと、『1番になれなかったけれど、僕は一生懸命走ったぞ！』、皆だったらどういう反応がいいと思う？」というような、いくつかの起こり得るパターンを提示し、1番にこだわる必要はなく、頑張ることに意味があるということを分かりやすく指導していました。毎年行われていたのかもしれませんが、私は初めてこの授業を見たので、こうやって予め子どもに心の準備をさせておくと、それが起こってしまっても子どもたちはパニックにならないのだと、大変勉強になりました。その成果もあって、今年は練習の段階から「1番になれないから嫌だ」という声が上がらなかった様に思います。

運動会当日。5, 6組の子どもの頑張りに目頭が熱くなることが沢山ありました。去年は運動会に参加出来なかった子どもが今年は応援席に座り一緒に応援出来たこと、歩行困難な子どもが最後まで一生懸命徒競走で走りぬいたこと等、書ききれないほどの感動がありました。しかし、いつもと違う環境に戸惑っていたのか、突然「きゃーー」と叫ぶ子どもの姿も見えました。

運動会が終わると、先生方の反省会に私たちATも出席させて頂きました。学年の種目で苦労した点、当日を迎えるまでに起こった様々な事柄等、多くの先生方の話を聞く中で、ハッとさせられた話がいくつかありました。「僕は組体操の指導を行う前に、なぜ組体操をやるのだろうと、自分なりに考えてみました。まず一つ目は“**我慢する**”ということ。」「5•6組の子どもたち、頑張っていましたね。ストレスが掛かることは重々承知だけれど、彼らもいずれは社会の一員になって出ていかなければならないから、**嫌でも集団の中に入る練習をしないといけない**よね。」確かに安定を第一に考えれば、ただ単調な生活を送ることが望ましいのかもしれません。しかし、特別支援教育の最終目標は“自立”です。社会に出て生活する中で、絶対に我慢しなければいけない場面はいくつもあります。そして、沢山の人の支援の下で日常生活を送るのであれば、当然集団の中に入らなければなりません。彼らにとっての行事とは、長い人生の中で待ち構えている“困難”に、柔軟に立ち向かえる練習の場であるのだな、と自分なりの答えを見出すことができました。今年の運動会も私にとって実りあるものとなり、多くの方に感謝の気持ちでいっぱいです。

ATとして白幡小学校に携われる時間も残り少なくなってきましたが、勉強させてもらえる環境に感謝し、目一杯楽しんで過ごしていきたいと思います。



アシスタント•ティーチャーと教育実習生

人間科学部　四年　久保寺史織

3年生の春から白幡小学校でアシスタント•ティーチャーとしてお世話になっていた私は、今年度はここで、教育実習生として1か月間お世話になりました。実習では、本当にたくさんの経験をさせていただきました。先生方の研究授業、特別講師の授業、さらには研究発表会にと、これから先、経験することができないのではないかと思うことをたくさん経験することができました。そのような中、指導教諭の先生をはじめ、多くの先生方に大変お世話になりました。お忙しいのにも関わらず、わざわざ時間をつくってくださり、たくさんご指導していただきました。必ず、何度も思い返し自分のものになるように吸収し、これからに活かしていきたいと思います。

子どもたちとの関わりも、教育実習では本当に深いものとなりました。授業では、子どもたちが助けてくれて、子どもたちが授業を進めてくれました。私のつたない説明に対しても、一生懸命聞いて、一生懸命考えてくれました。今回、実習でお世話になった4年2組の子どもたち、担任の先生には、何度お礼を言っても足りないくらいです。私は、ここで、一生忘れることのないだろう最高のクラスに出会うことができました。

アシスタント•ティーチャーで学校に行っていた私と、教育実習生として学校に行っていた私は、視点の違いに気付くことができました。今までは、悩んでいる児童に対しての支援を主に行うことを考えていました。しかし、教育実習生としていく中では、多くの児童の言葉に耳を傾け、多くの児童の行動に目を向けようとしました。子どもたちの良いところ、直した方がいいところ、たくさんのことが見えるようになりました。そこで私は、さらに自分の課題も明確になりました。

これからは、アシスタント•ティーチャーとして、教育実習で学んだことや明らかになった自分の課題を持ち、白幡小学校に行くことができること、また先生方の指導の仕方や子どもたちの様子を引き続き見て学んでいけることを幸せに思います。

白幡小学校での活動を通して

外国語学部　三年　田端真侑

白幡小学校の特別支援学級である5•6組でボランティアを始めて、半年が過ぎました。「田端先生、今日も来てくれた」と言いながら駆け寄ってきてくれる子どもたち、困ったときはいつでも相談にのってくださる先生方に支えられながら、毎週の白幡でのボランティアを楽しみに活動しています。

夏休みが終わり、久しぶりにボランティアに行って驚いたことがあります。それは、一人ひとりの児童が、身体的にも精神的にも一回りも二回りも大きくなっていたということです。「精神的」というのも、夏休み前であれば、例えば学級全体で何かを決めるときに、最終的に自分の意見が通らなかったり自分のやりたいことができなくなると分かった途端泣いたり、もう参加したくないと消極的になってしまう児童が、夏休みを終えて二学期になると周りの仲間の意見を受け入れながら自分も学級の一員として頑張ろうという積極的な態度をとるようになっていたのです。これには見ていた私まで嬉しくなり、その児童の傍により声をかけると、児童が「もうお姉ちゃんだからね。えらいでしょ」と誇らしそうにしていた姿を忘れることができません。今回の場合は目に見える大きな変化ですが、そのほかにも児童のちょっとした仕草や変化を常に見逃さないようにし、これからもその時々に応じた言葉がけをしていきたいと思っています。

私は、ボランティアを始めた時から、児童とのコミュニケーションを常に意識しながら活動しています。それは私のようにボランティアを“する側”と“受ける側”である児童とのコミュニケーションが双方の理解につながり、共感を生むだけでなく新たな信頼や今後の展開へのヒントになると考えるからです。また、コミュニケーションをとることで、本当に必要な活動の姿を見出すことも可能であると感じています。私がボランティアをしている5•6組にもなかなか周りの仲間や先生と話すことがむずかしく、うまくいかないと黙ってうつむいてしまう児童がいるのですが、たとえ返事が返ってこなくても毎週のボランティアで私から積極的に声かけをしていると、小さな声ではあるものの返事が返ってくるようになり、自分の日々努力していたことが成果となって現れた瞬間だととても嬉しく思いました。

もう少しすると白幡小学校を卒業して中学校にいってしまう児童も5•6組にはいますし、私自身、教育実習などでなかなかボランティアに参加できない日も増えてくるため、今のうちから一日一日の活動を精一杯、児童のために自分ができることを少しでもすることができたらと考えています。

反省を活かして

外国語学部　二年　阿部良美

ATのボランティアを始めてからもう半年が経ちました。9月には宿泊体験や運動会に参加させていただいたり、11月には授業研究会に参加させていただいたりと行事にも積極的に参加させていただき、とても充実した活動をさせていただいています。通常のAT活動でも今まで2年1組に行くことがほとんどだったのですが、最近では同じ学年の2,3組にも行く機会が多くなり、前期までの活動と比べ、2年生全体の児童と接する機会が多くなりました。

このように、土曜塾のボランティアを始めてから約1年半経つものの、新しい経験をする機会が多いので、私は後期の目標を「1回1回のボランティアで自分ができなかったことを見つけて、どのように解決していけば良いのか考えながら取り組む。」と設定しました。この目標を掲げてから、ボランティア活動を行う度に自分がどんなことを改善していけばよいのかということが以前より明確にわかるようになってきました。

最近の活動で一番印象に残っていることは、学年の行事で学校の近くの公園に歩いて出かけたときのことです。学年の行事のため、顔なじみの子が多くいる1組の子だけでなく、学年の子全体を見なければなりませんでした。3組から1組という順番に出発したので1番最初に見た子は3組の子たちです。3組の子たちはほぼ初対面の私に対しても移動している間、話しかけてくれたので、すぐになじむことができました。実際に公園にいる間も「先生見て！」とブランコに乗っている姿を見せてくれたり、「虫捕まえたよ！」と声をかけたりしてくれました。学校に帰るときになり、集合時間になってもまだ自分の持ち物を片付けることができなくて、集合できていない子がいました。私は、その子の荷物をまとめるのを手伝おうと思ってその子の荷物を持ちました。そのとき、その子に「勝手に触らないで！」と言われてしまいました。私はとてもショックでした。なぜなら、自分なりにすぐになじむことができたと思うからです。私は「どうして触っちゃいけないの？もうみんな出発しちゃうよ？」と言うと、「自分でできるから。」とだけ言われてしまいました。

私はこのときどうしていいのかわからなくなってしまい、ただその子の準備が終わるのを見ていることしかできませんでした。次のクラスに迷惑をかけてしまわないように早く準備をしなければならないという気持ちと、初めて話す子にどんなふうに言って注意をしたらいいのかという思いが錯綜していました。今思えば、しっかりとその子に遅れているということを指摘して注意すれば良かったのかと思います。

この時の活動での課題は初対面の児童ということにとらわれすぎて、その場に適した態度をとることができなかったということです。私はこのように1回1回のボランティアでこうしておけば良かったな、と後悔することが多いので、そう思ったことを次の活動でも活かしていけたらいいなと思います。これからの活動でも自分の活動を1回1回振り返り、良かったことは継続していけるように、悪かったことは改善していけるようにして取り組んでいきたいです

子どもたちをしっかり「見て」学ぶ

外国語学部　三年　山本賢治

白幡小学校の土曜塾でボランティアを始めて1年が経ちました。分からないこと、難しいことはまだまだ沢山ありますが、このボランティアを通して沢山のことを学ぶことができました。3年生の後期は土曜日に授業に入ってしまい、活動時間は今までより少し短くなりましたが、その中でもいろいろな事に気づかされるので充実した時間となっています。

今期、私が大事にしているのは児童の様子をしっかり「観察」することです。今までは、児童と関わることをとにかく重視していましたが、関わることばかりに意識が行ってしまい、児童の表情、様子や教室の雰囲気があまり見れていなかったことに気づきました。もちろん子どもたちと関わることは大事ですが、それより子どもたちをしっかり「見て」学ぶことを今期のボランティアのテーマにしています。

実際に、子どもたちの表情や様子を注意深く見てみると、どの子どもが集中しているか、あまり集中できていないか。活動を楽しんでいるか、退屈に感じているかなどがよくわかります。また、さっきまですごい集中していたのに、集中力を切らしてしまったなど、子どもの様子の変化も、しっかり観察することで感じ取ることができます。

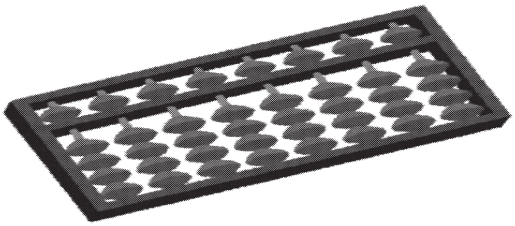
他にも、児童が英語を発音する機会をしっかり作ってあげると、活動を楽しんでくれるけど、英語を発音する機会がなくなってしまうと、退屈に感じて集中力を切らしてしまうなど、しっかり観察することで気づく事が沢山ありました。今後も、児童たちをしっかり「観察」することを大事にし、沢山の事を学んで

教職ボランティアを通して学びたいこと

人間科学部　一年　河田直磨

教職ボランティアをして行く上で、私は2つの目標をもっている。1つ目は、先入観や知識なしに児童と触れ合うことで児童の本質を感じ取り、今後の学習に生かしていくこと。2つ目は、大学で勉強しているだけでは知り得ないリアルな学校の裏側や、教師の目に見えない努力や苦労を間近で見て、教師になることへの自分の気持ちを再確認していくこと。この2つである。

1つ目の目標に関しては、まだ1年生であるため、児童への対応や、学習指導に関しては全く知識がない。そのような状況で、自分の頭で考えて最善と思われる行動を選択していくのは、とても困難なことである。失敗ももちろんあるが、実際に身を持って体験することで、机に向かっているだけでは得られない知識を得たり、これから学んで行くことにも活かせると考える。10月から白幡小学校での土曜塾ボランティアに参加し始めた。まだ数回しか活動には参加していないが、数少ない中でも、児童が目を離した隙にいなくなってしまうなどといった問題にも直面した。しかし、自分ではどうしようもないような状況を、即座に解決することのできる方々に囲まれることで実践的な知識を得ることができた。注意をするにしても、ただ注意をするだけではなく、どうしてその行為をしてはいけないのかを理解させる注意の仕方を見て、率直に凄いと感じた。このような体験が、教育実習に行ったときや、自分が教師になることができたとき、また普段の生活にも、大いに役立つと考える。これからも、実際の児童との関わりを通して様々なことを学びたい。



2つ目に関しては、ボランティアの現場で尽力される先生方の近くで刺激を受け、教師になりたいという気持ちに火をつけたり、逆に本当に教師になりたいのかと自分に問いかける機会を作りたいと考えた。現実問題として、希望した人がみんな教師になれるわけではないし、教師になれたとしても精神的に苦しみ、教壇から退く人が後を絶たない。自分の学科の単位を取得するのに教職課程が全く負担になっていないかと言われれば否定はできない。そんな厳しい状況が続いて行くことに自分が本当に耐えられるのか、それに勝る教師になりたいという気持ちが自分に本当にあるのか。理想論ではなく、実体験を通し、常に自分の気持ちを再確認し、進むべき道を検討し続ける必要があると考えた。

土曜塾に限らず色々な教職ボランティアに参加し、現場の先生方や、同じ志を持つ仲間から様々なことを学び、刺激を受け、多面的に自分自身を見つめていきたい。1回1回のボランティア活動を大切に、活動で得た経験をしっかり噛み砕いて自分の糧にしたいと思う。

土曜塾で学んだこと

人間科学部　一年　藤原　達矢

私は現在、土曜の午前を活用し、大学の近辺にある白幡小学校に土曜塾のアシスタントとしてボランティア活動を行っている。

教育者の道を志している私は、大学生活でのこの経験が、将来的に教師となったとき実際の現場で生きてくるのではないかという考えから、この活動に参加する決意をした。普段ではなかなか経験できない教員に近い立場から児童に接することができ、新しい視点から何かを発見ができると考えている。

後期の目標は「児童たちとメリハリのある関係を築くこと」である。つまり勉強に励むときはしっかり教え、休み時間などは会話を積極的にするなどコミュニケーションを取ることを目標に掲げている。また、積極的なコミュニケーションにより児童との距離を縮めるとともに、児童との関わり方や児童の実際の行動を見て学ぶことで、自分自身の現場での対応の力も向上していくと考えている。

これまでに何回か白幡小学校に出向き土曜塾を経験してきたが、やはり簡単にいくものではないことを痛感させられた。私が現在担当しているのは小学校低学年である。児童たちは好奇心が強く周りのことに気を取られてしまい、集中して勉強する児童が少ない。偏見ではないが見た限り男子児童に多い印象であった。例をあげると、勝手に立ち歩いたり、騒いだりしている児童を見かける。しかし、そのような児童にはアメとムチを提示してあげると、アメの為に気を取り直して勉強をし始める児童もいた。これは、土曜塾を行って一番目に発見した事である。

これから中学校のATなども経験したいと考えており、少しずつ段階を踏んでスキルアップしていく為には、小学生と触れ合える土曜塾はしっかり経験しておきたいことである。後期の時間で少しでも児童とのコミュニケーションをとる機会を増やしたり、わからないところをいかにわかりやすく教えることができるかという能力を向上できるように、一日ずつ明確な目標を持って児童たちと一緒に努力していきたいと考えている。

土曜塾での目標

科目等履修生　沖野勇介

私は昨年4月28日から土曜塾ボランティアをはじめた。私の白幡小学校でのボランティアの目標は、「児童とボランティアがお互い学び合い、お互い楽しく、仲良く、明るく、学べる場にしていく」ことである。それには気をつけなければならないことがある。まずは、分からないことが有れば担当者に聞くことである。保護者ボランティアでもいいし、最終的には事務局長さんにきくのがいいだろう。一人で悩まずいろいろな人の助言を頂くことも大切である。そうすることで次に活かせるからである。

次に、教えるときに児童の目線に立ち考えることである。時間が掛かってもじっくり理解するまで先に進まない。児童によって個人差があり、何を理解していないのかを把握しておかなければならないからである。そして、「児童と共に学んでいる」とボランティアが自覚することである。それはボランティアが教えるだけでなく、児童を通して学んでいるからである。要するに、児童とボランティアはお互いが教え教わりながら学んでいるのである。そのことを私たちは忘れてはならないと思う。

そして、児童は大人や教師の行動をよく見ている。それは、良いことや悪いことを含めてである。したがって、ボランティアも日頃から自分の行動はよく見られていると思い、軽率な行動や言動をとらないように注意することが必要である。

また、児童は大人が思うように育つ訳ではない。児童は大人が考えているように未熟で、弱いかもしれない。しかし、児童は成長していく過程で様々なことを学び、身につけていくものである。それは大人が分かってあげなければならない。児童もまた自分の思い通りにならないことを苦に思い、意欲が薄れてしまうこともある。そういう時こそ、大人がじっくり話を聞くことが大切だといえる。

そして、児童の行動や言動に一つ一つ耳を傾けて、優しく見守ることも大切なことである。そのように、大人が児童を支えていく必要があると思う。

最後に、児童が楽しく、明るく勉強できる場が学校のあるべき姿だと考えている。土曜塾のボランティアもあくまでそうした学校作りの手伝いとして児童を支える場であり、そういう場を私達が作って行く必要がある。そして、いつも笑顔を絶やさないように心懸けて実際に行動にしなければならない。以上述べたことを心掛けて、私は今後のボランティアに取り組んでいきたい。

学校ボランティアでの活動を振り返って

人間科学部　三年　帰山詢平

私は白幡小学校の土曜塾にボランティアとして参加させていただき、改めて自分が教師になりたいのかどうかを考えさせられました。今までは、自分が子どもが好きなので教師に向いているという思いから、ボランティアに参加しましたが、実際に活動して子どもと接してみると、思った通りにはこなせないことに気づきました。

初めて小学校に行った時のことですが、一度も子どもの勉強を手助けすることができませんでした。私は、最初は子どもが分からない問題があったとき手をあげて質問してくれるものだと思い、受け身の姿勢で質問してくれるのを待っていました。しかし、自分から積極的に声を掛け、接していかないと子どもたちはなかなか心を開いてくれないということが分かりました。

自分とは世代の違う子どもたちにどのように接していけばよいのか度々悩み、ボランティアに足が遠のいたりして、自分は教師に向いていないのではないかと思ったこともありました。しかし、普段の生活の中で、土曜塾に来ている子どもたちから声を掛けられたことを思い出すと、やはり教師になりたいなと思います。

ボランティアを通して自分の将来について考える機会があり、とても良い経験をさせていただいていると思います。これからもまた新たに子どもとの関わり方について学べるよう、頑張っていきたいです。

発行日：２０１４年　２月１５日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室
TEL：０４５－４８１－５６６１（内線４２２８）
FAX：０４５－４１３－４１５４
E-mail：ttcr-yakohama@kanagawa-u.ac.jp
UPL:http://www.kanagawa-u.ac.jp/
teacher_training_course/jysp

発行日2014年　2月15日

小学校グループボランティア通信
～大口台、二谷、神橋、南神大寺小学校～

○目次○

【大口台小学校】

活動を通して感じたこと 自治行政学科　4年 吉田　絵理子	1
今年度の活動を通して 人間科学科　3年 鈴木　陸人	2

【二谷小学校】

言うことを聞かせるその前に 人間科学科　3年 萱森　弘貴	3
宿泊体験で学んだこと 自治行政学科　2年 横山　裕也	3

【神橋小学校】

全体を見る力 人間科学科　3年 浅井　千絵	4

【南神大寺小学校】

元気コインを通して 人間科学科　2年 橋本　栞	5

【大口台小学校】
活動を通して感じたこと

自治行政学科4年
吉田　絵理子

私は横浜市立大口台小学校において、アシスタントティーチャーとして活動しています。今年度は、1年生の子どもたちと過ごす時間を多くいただいています。この時期の1年生は、学校生活に慣れ、自己主張をする子も増えていると感じます。私よりも学校の様子を知っているため、分からないことがあるときには子どもたちに聞きますが、皆はりきって教えてくれるので、頼もしいな、と感じることも多くあります。

ボランティア活動の中では、アシスタントティーチャーという立場ではあるものの、子どもたちに「先生」として見られていることはあまり無いな、と感じます。呼び方についても、「先生」と呼んでくれる子はたくさんいますが、「吉田さん」と呼んでくれる子もいます。それは、まだ私が先生ではないということを子どもたちが知っている、ということもありますが、私自身の振る舞いが子どもたちにそう感じさせているところが大きいようにと思います。

子どもたちと関わる中で、その良いところを見る一方、望ましくない行動をとる子どもの姿を目にすることもあります。そのようなとき、その場で、子どもが納得できるような形で注意をする必要があることを感じますが、実行に移したことはありません。「自分の考えは正しいのかな」、「どのように注意したら良いのかな」などと考えている間にその場は過ぎてしまい、結果として子どもの行為を見過ごしてしまっていることがあります。現場の先生方とは異なる私の甘い対応が、子どもたちに先生と見られていない理由の一つであるように感じます。子どもから「優しい」と言ってもらうことがありますが、それはきっと私が「怒らないから」なのだろうと振り返ります。

子どもの行為を注意するにあたっては、その行為を見極める力や指導力などの「技術」や、子どもとの「信頼関係」が必要だと考えます。これらは週に1度の活動の中で簡単に養われるものではないと思います。しかし、そもそも子どもの成長にとって何が大切であり、そのために自分がどのような行動をとるべきなのか、ということを考えれば、何かしらの形で子どもに注意を呼びかけることはできると感じます。本当の意味で「優しい」教師を目指すために、今一度、自分の気持ちと行動を見直しながら、今後の活動に取り組んでいきたいと思います。

学校生活や子どもの様子を感じることができた小学校での活動は、私にとって本当に貴重なものでした。何よりも、「子どもの頑張る姿を見ることの嬉しさ」や、「子どもと関わることの楽しさ」を強く感じることができた2年間だったと振り返ります。教師として学校現場に入り、その厳しさや大変さを知った後にも、大口台小学校で感じたこの気持ちを忘れずに子どもたちと関わっていきたいと考えます。

今年度の活動を通して

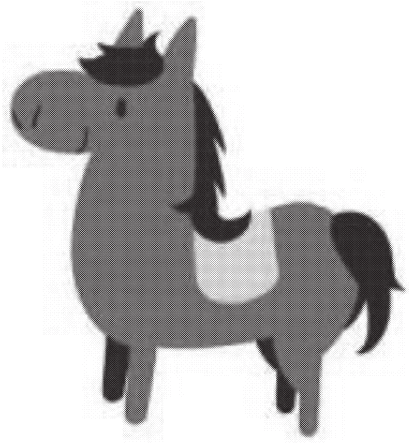
人間科学科3年
鈴木陸人

私は昨年の３月からATとして大口台小学校に通い始めて、まもなく１年がたとうとしています。今年は教育実習があるため、実際の学校現場で先生や児童の行動を見ることができるのは、貴重な機会です。学ぶことが多く、１回１回の活動がとても充実したものとなっています。

私はさまざまな学年に入って活動することが多いですが、その中で低学年と高学年の接し方に少々困ってしまうことがあります。低学年の場合、優しく、分かりやすい言葉で話しかけることを意識して接しています。しかし高学年になると、優しい口調で話しかけると、馬鹿にしているのではないか？と思われているのではないのかと考えさせられます。学年が上がるにつれて、児童も心と体が成長していきます。その中で、私自身も言葉の選択をしていかなければなりません。１年生に６年生に使うような難しい言葉を使っても１年生は理解してくれません。また６年生に１年生に使うような言葉を使っても不快な気持にさせてしまうかもしれません。児童にかける言葉にも気をつけていきたいと思っています。

また今年度は体験学習にも参加させていただきました。宿泊学習、動物園への遠足など、とても貴重な体験をさせていただきました。普段の学校生活ではみることのできない児童の姿もみることができました。また先生方の行動を見て、たくさんミーティングをして児童が安全に学習できるように計画、実行していることがわかりました。ひとつのことを計画し、実行することはとても難しいものだと感じました。

今後もたくさんの行事に参加させていただき、なるべく多くATとして活動していきたいです。よろしくお願いします。



【二谷小学校】言うことを聞かせるその前に

人間科学科3年
萱森 弘貴

「子どもは考えることが好きだ。」先日、ある方の文章の中でこの言葉に出会った。学校教育という性質上、教師は児童生徒に言うことを聞いてもらう場面が多々ある。児童生徒は将来的に、ただ教師の言っていることをそのまま聞くのではなく、その意味するところを理解して自分たちの頭で考えることが必要になる。小学校の先生たちは、教師の言葉に注目させ、興味関心を持って、聞いた話を次の行動に結びつけていくよう工夫をしている。

実際に私が二谷小学校で経験した工夫がいくつかある。たとえば朝会の場面でざわついている児童に対して、言葉で注意するのではなく、手をリズムよく叩くことで注意を引かせて、自然と話し声が収まるというように、一緒に手を叩く遊びをすることで話をする(聞いてもらう)準備を整えていた。他にも、落ち着かない児童が数人いる時に、落ち着いて授業に参加している児童にポジティブな声かけをすることによって空気を引き締めたりする等があった。

これらの工夫には「子どもは考えることが好きだ」という前提があると思う。たしかに場合によっては大きな声で叱りつけて児童に言うことを聞かせることもあるだろう。それは人間だから仕方がないし、そういった理不尽とも言える怒られ方や話の聞かせ方を児童が経験することはひとつ価値あることだと、私は考えている(それを多用することやヒステリックに怒鳴り散らすことは決して良いとは言えないが)。しかしながら、二谷小学校で見学した先生方の見事な教え方や工夫に対して児童が生き生きとリアクションしている様子を見ると、言うことを聞かせるその前に、やるべきことがあるのではないかと考えずにはいられない。

そして私自身も神奈川大学生のアシスタントティチャーとして児童に話を聞かせる(聞いてもらう)必要がある場面がある。例を挙げるとすると、ノートを取るタイミングがワンテンポ遅い児童にノートを写すよう促す場面や、教室の外に出てしまう児童に教室に戻るよう促す場面等が実際にあった。

それらに対して、上記のように子どもに考えさせるきっかけを自然に作り出すことはなかなか難しい。１対１の場面でこちらがしてほしい行動をしてもらうためには、ただこちらの要求を言い聞かせるだけではいけない。そもそもこちらがしてほしい行動をさせるという考え方では役に立たない(児童は自分から動かない)。それでは、私はどうやってそれらの場面を乗り越えているかというと、相手である児童にとって何が行動の妨げとなっているのか、今何をしたいのか、そして「いま何を考えているのか」を考え続ける姿勢で関係性を築くようにしている。その基本となる行為として「その児童のする話をよく聴いて、質問をする」ことを心がけている。まだ成果が出ているのかどうかわからないけれども、現時点で私が大切にしている工夫はこのようなものだ。

宿泊体験で学んだこと

自治行政学科２年
横山裕也

私は、ATでお世話になっている二谷小学校の３年生の宿泊体験の引率に参加してきました。宿泊場所は、横浜市金沢区の「野島」でした。普段の授業では見せない児童たちの表情や、引率する教員としての仕事などを体験することができ、私自身も充実した宿泊体験を送ることができました。

１日目は、野島に向かう前に、子ども宇宙科学館にてプラネタリウムを鑑賞しました。一番後ろの席で児童の様子を伺っていましたが、天井に映し出された綺麗な星空に、静かに夢中になっている様子でした。授業中はいつも賑やかだったので、これほど真剣に星空を眺める子供たちを見ることができ、感心しました。宇宙科学館を出て、野島に到着すると、すぐに現地の漁師の方から野島に住む生物のお話を聞かせてもらいました。漁師さんが今朝、実際に取ってきた様々な生物を見

せながらの説明してくれました。また、魚や貝などというような、実際に触れる機会がない生物を手に取ってみることもでき、貴重な経験ができたのではないかと思います。

その後、宿に足を運び荷物を部屋に置くと、すぐに夕食の準備にかかりました。子供たちは、「ご飯を炊く」、「レトルトカレーを温める」、「ウインナーを茹でる」という、私たちにとってはとても簡単な夕食作りを８人グループで行いました。しかし、８人でまとまって協力することは、子供たちには難しかった様子で、多くの時間を費やしました。しかし、どの班も苦労して作った食事は、非常においしく食べることができたようです。夕食作りでは、協力することの大切さ、また作業を分担することの大切さも学べたのではないかと思います。

お風呂に入るとすぐに就寝時間となり、充実した宿泊体験１日目の興奮がおさまらない子供たちを寝かせることになりました。全員が寝付くまで２時間ほどかかり、見回りが大変でした。また、「夜尿が心配」といった子供もおり、夜中に起こしトイレに行かせたり、お腹が痛くなり寝付けなくなってしまった子供を見てあげたりと、ほとんど寝ることは出来ませんでした。この時、私は3年生の子供たちを「預かっている」ということを非常に実感することが出来ました。今回の宿泊体験は1泊2日でしたが、これ以上の長い期間の宿泊体験を引率するには、体力が必要だなと感じました。

早朝６時に子どもたちが起床すると、自分たちのベッドを片付ける作業に入りました。布団は4つ折り、マットは3つ折りなどと細かい指示に従って子供たちに片付けをさせていましたが、子供たちには少し難しかったようで、困惑していたようでした。しかし、大きなシーツなどは、協力し合う姿が見ることができました。部屋によってはひとりひとりのベッドをみんなで片付けている所もあり、素晴らしいと感じました。

朝食を終えると、フォトラリー（チェックポイントを探しながら野島を探検する）を行いました。班ごとに一枚の地図を頼りに出発しましたが、第一チェックポイントで待機していた私のところには、1時間経ってもどの班も来ませんでした。多少焦りを感じていた中、最初の班が到着し、話を聞いてみると、方角がいまいちわからなかったとのことでした。他の班も同様で、時間も押していたので方角のみを教えると、子供たちはスムーズに行動できたようでした。

3年生たちは、社会で地図の使い方を習ったようでしたが、実際に地図から情報を読み取って行動することは、多少難しかったようです。

宿泊体験の全ての日程を終えて、小学校に帰ってきた子供たちは、満足した様子を浮かべながらも、どこか疲れているような表情も見せていました。終わりの挨拶を終えると、子供たちは、迎えに来た保護者の方々へ駆け寄り、早速宿泊体験の思い出を話していました。

私自身も貴重な体験をすることができました。普段のATよりも、自分が指導を行う場面が多く、自分が持っている教員としての力を試すことができました。しっかり指導できたこともあれば、なかなか上手くいかなかったこともあったので、改善していかなければ、と思いました。

【神橋小学校】全体を見る力

人間科学科3年
浅井　千絵

私は昨年４月から週１回神橋小学校に伺っています。最近は３年生の子どもたちと時間を共にすることが多くあり、その中には１つのことに集中することを苦手とする子がいます。そのため、私は１人の子につきっきりで１日を過ごすことがほとんどです。その子はこれまでにも、隣の子の邪魔をしたり、授業中に教室を飛び出したりすることが多くありました。以前は、教室を飛び出した時、どこかに行ってしまうのではないかといった心配と私が見ていないところで何か危険な目に合っていないかといったATとしての責任を感じ、すぐに追いかけていました。しかし、面白がりながら同じ行動を繰り返している姿を見て「追いかける」という行為は逆効果なのではないかと考えるようになりました。ある日、追

いかけずに見守るよう、アプローチを変えてみることにしました。

しばらく廊下から見守っていると何事もなかったかのように自分の座席に戻ってきたのです。その後、国語科の教科書の文章中に出てきたわからない言葉を辞典で調べる学習が行われました。しかし、その子は全く授業に参加する態度を見せずに、授業中に遊び始めてしまいました。戸惑いもありましたが「私が何か行動を起こさなくては状況が変化することはない。何かしてあげられることはないだろうか」と、自分なりにその子の個性にあったアプローチの方法を考え、行動してみました。まずは、辞書に対する興味をもたせるため、その子の近くに辞典を持っていきました。日頃から、魚に対する興味をもっていることを知っていたため、その子の興味をひきそうな「サメ」や「イカ」などのイラストと意味が書かれているページを開いて見せました。何度か繰り返していると、少しずつ辞書に興味をもち始めました。そして、学習に関係がある言葉のうち、自分の興味のある言葉だけではありましたが、自ら調べ始めました。これは、その子にとって成長に繋がったと思います。また、授業に興味を示さなかった子に対して、みんなと同じ空間で、みんなと同じことを経験させてあげることができたということは、私にとっても成長に繋がりました。

しかし、今回の出来事は一対一の関係で成り立ったものであり、今の私の能力では学級全体を運営していくことはできないと感じました。今後、学校ボランティアを通して、もっと多くの子どもと関わったり、現場の先生方から技術を盗んだりしながら、教師として必要な力を身につけていきたいと思います。

【南神大寺小学校】元気コインを通して

人間科学科2年
橋本　栞

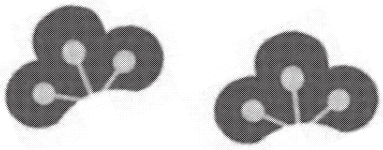
私は昨年7月から南神大寺小学校にボランティアとしてお世話になっています。毎週水曜日、4年1組のみんなと貴重で楽しい1日を過ごさせてもらっています。お世話になってまだまだ短い期間しか経っていませんが、このクラスにお世話になり、教師は大変だな、と気づくことがありました。

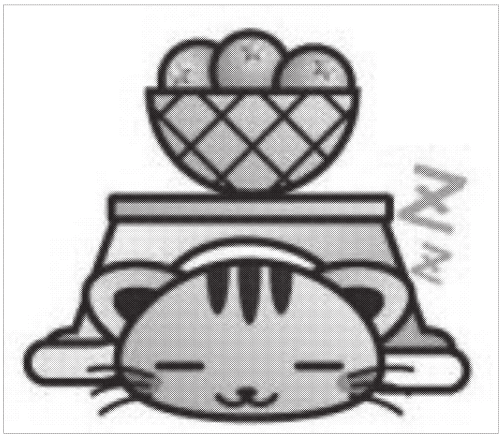
4年1組では「元気コイン」というものがあり、帰りの会で日直と先生が、今日1日で頑張っていた人、良いことをした人にコインをかたどったシールを渡す、ということをしています。私も、毎週コインを渡させてもらっていますが、人の良いところを見つけるのは大変だと感じました。

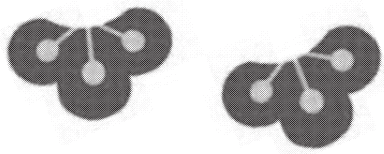
ありがたいことに、私の周りにはいつも子どもたちが寄ってきてくれて、いろいろお話をしたり、遊んだりするのですが、近寄ってきてくれる子たちの良いところしか見つけることができません。しかし子どもたちの中には遠慮をしているような子どもや、なかなか近寄ってきてくれない子どももいます。まだまだ私は未熟なので、その子たちがどのような行動をしているのか、どんな良いことをしているのかなど、見ることができないことがよくあります。

担任の先生はしっかり見ていて、帰りの会では私が気付かなかったような良いところを見つけてみんなに伝えています。そのとき自分の視野の狭さを痛感し、反省させられます。私がコインを渡すのは週に１回ですが、先生は毎日みんなのことを見ていると思うと、やはり先生は偉大だと感じます。

人の悪いところ、欠点、未熟なところは人間だれでも簡単に見つけることができます。ただ、具体的に良いところを見つけるのは難しいことです。私は元気コインを通して、良いところを見つける難しさを再確認することができました。これからはクラス全員と積極的に話したり、勉強したり、遊んだりして、1つでも多くの元気コインを渡そうと思います。そして、元気コインをもらった子どもの嬉しそうな笑顔をたくさん見ようと思います。







発行日：２０１４年　２月１５日

発行所：神奈川大学 教職課程支援室
TEL：０４５－４８１－５６６１（内線４２２８）
FAX：０４５－４１３－４１５４
E-mail：ttcr-yakohama@kanagawa-u.ac.jp
UPL:http://www.kanagawa-u.ac.jp/
teacher_training_course/jysp

Page 1

のびのび楽習塾

目次:

自己の表現の場 外国語学部　2年　桜井素雅	1
のびのびな半年 経済学部　2年　平木松治	2
自覚 経済学部　3年　臼井勇太郎	2
コミュニケーション力と指導力 工学部　3年　倉田凌	3
支援の方向と目標 工学部　3年　勝俣恵梨奈	3
子どもたちを教えて見えてきた課題 工学部　3年　西尾真由子	4
変わるものと変わらないもの 経済学部　3年　津輕範行	4
のびのび楽習塾で学んだこと 外国語学部　3年　伊藤伎恵	5
言葉の壁を越えるためにできること 工学部　3年　安井大知	5
子どもたちとふれあう 工学部　3年　恒賀聖司	6
子どもたちに寄り添う 外国語学部　4年　佐藤陽子	7
半年を迎えて 法学部 4年　中島慎介	7
半年の振り返りと今後の目標 外国語学研究科　1年　鈴木惠介	8

「自己表現」の場

外国語学部　２年　桜井素雅

私はのびのび楽習塾でボランティアをさせていただいて、早くも１年が経ちました。ほぼ全員の生徒と授業や休み時間の折に関わり、各生徒の特徴がだんだんとわかるようになってきました。毎回のように活動に来て熱心に勉強をする生徒もいれば、たまに来てもなかなか勉強をする姿勢にならない生徒もいます。ただ、私はそれでもよいと思っています。私は、生徒がのびのび楽習塾に来る理由が「勉強をするだけ」になってほしくはないです。生徒同士や学生と生徒間の会話や遊びを通して、のびのび楽習塾にくることが生徒にとっての「楽しみ」であってほしいと思っています。

外国につながる子どもたちの中には、学校ではなかなか友達ができずに一人でいて、授業中はほぼ寝ていることが多い子どももいます。彼らは、日本語が十分に習得されていないことで授業についていけなかったり、友達と上手にコミュニケーションがとれなかったりと歯がゆさを感じているのだと思います。そのために学校では自分を十分に表現できていないのではないかと考えました。このことから、私はのびのび楽習塾が彼らにとっての「自己表現の場」として活用できないか考えました。具体的には、現在行っている活動内容とレクリエーションの改善です。まず、毎回授業の終わりに行っている「日記発表」のテーマを設定することです。今まではその日の授業の内容と感想を述べるだけだったため、日記の内容が固定化されてしまい面白みがなくなっていました。しかし、日記のテーマを設けることで内容に変化がみられました。それだけでなく、日記が書きやすくなった子どももいて効果がありました。また、日記を発表した後にそれについて質問をすることで、相手に伝える練習になったり自分のことを知ってもらったりするよい機会になりました。次にレクリエーションの企画を子どもたちで行うことです。この案については現時点では未実施ですが、子どもたち同士の繋がりを深めたりや発言をしたりするよい機会になると考えています。

このように外国につながる子どもたちがのびのびと勉強したり、会話したりできるような環境をつくることが、私たち学生のすべきことではないかと考えます。そのために、どうしたらよいのかを学生間で考え、改善していきたいと思います。最近生徒数も増え活発になっているため、私も子どもたちのパワーに負けないように頑張ります。

のびのびな半年

経済学部　２年　平木松治

私がのびのび楽習塾に参加してから半年が経ちました。初めのころはうまく教えられるのか不安でした。しかし、のびのび楽習塾では毎回の活動日までに学習相談をして、その日に勉強する内容の準備をします。そのため、活動日までに予習ができ、自信を持って教えることができました。のびのび楽習塾はその名の通り、基本的にはのびのびと子どもたちの勉強したい教科を中心に計画を立てて勉強します。

のびのび楽習塾に来ている子どもたちは、小学生と中学生です。いろいろな子どもがいて、一緒に勉強していて毎回の活動が楽しいです。のびのび楽習塾は、１コマ５０分の授業を２回行っていますが、途中で集中力が切れてしまって、周りをきょろきょろ見たり、席を立って出歩いてしまう子もいます。そのようなことに対処するために、席の配置や向きに気を付けて、壁側を向いて勉強したりして、勉強以外のほかの情報が入らないようにして、子どもの気がそれないように注意しています。配置がうまくいくと子どもの勉強への集中が増します。

私はのびのび楽習塾に参加してみて、ただ単に勉強を教えたり、教え方を考えたりするだけではなく、勉強をする姿勢や子どもとの接し方を多く学んでいるような気がします。さまざまな子どもがいて、それぞれ違った学力があって、それらに対応できるようになることで将来教育現場に出たときに、いろいろな生徒に対応できるようになると思います。

自覚

経済学部　３年　臼井勇太郎

私は、のびのび楽習塾に参加しているメンバーの中ではかなり古参の部類に入ります。新しい学生メンバーも加わり以前よりも活気が出てきたなと思います。のびのび楽習塾は人手不足気味でしたのでかなり助かっています。

私は、昨年の夏休みを利用して二日間、港中学校の国際教室を見学させていただきました。また、生徒の夏休みの宿題も手伝いました。私が驚いたことが一つあります。港中学校を卒業した高校生が後輩のために勉強を教えている事です。また、日本語の勉強方法なども教えていました。これは非常に良いことだと感じました。この事はのびのび楽習塾でも活かせるのではないか、と考えました。

港中学校の国際教室ではホワイトボードを用いて生徒が勉強していました。これはのびのび楽習塾にも活かされていることです。二日間勉強を教えていて思ったのがやはり、日本語の習得の難しさだと思います。これは、生徒の個人差が関連してくると思いますが、英語を日本語に訳しても、その日本語の意味が分からない事が多々ありましたので、私がその事をいかにして分かりやすく伝えるかが重要だと思いました。

次に、のびのび楽習塾では、勉強をする生徒と学生を固定化すると言うことを行っています。これにより、今までは流動的だった学習支援が、一貫性のある継続した学習支援を行う事が可能となります。それに加え、学生側にも責任感が生まれるので大変良い事だと思います。

最後に、私はのびのび楽習塾が子どもたちにとって居心地の良い場所になるようにしていきたいと思います。字のごとく楽しく習うという事であると私は考えるので、ただ勉強するのではありません。そこにはレクリエーションがあり、笑いあり、日常の他愛もない会話あり、それらを全て含めてのびのび楽習塾だと思います。これからもそんな環境をつくっていけるようにサポートしていきたいと思います。

コミュニケーション力と指導力

工学部　３年　倉田凌

私がのびのび楽習塾の活動を始めたのは、昨年の１０月１２日からであり、まだ３ヶ月程度しか活動していませんが、その中で、これからのために改善しなければならないことをみつけることができました。

ひとつは、よりコミュニケーション力を高めることです。コミュニケーション力は自分ではあるほうだと思っていました。しかし１回目のボランティアのときに緊張してしまい、いつも通りに話すことができませんでした。教える立場の人が緊張しておどおどしていたら生徒はそんな人に教えてもらいたくないと思うので、毎回会ったときは大きな声であいさつをしてコミュニケーションをとり笑顔で接していくことを目標にしたいと思います。

最近は担当になった子と空いた時間（授業開始前、終了後、おやつの時間など）でその子の好きなこと、趣味や育った国の話などたくさんの話題をだして接するようにしています。勉強も大事ですが、それ以上に人との関わりのほうをより大切にしてほしいと思っているからです。外国につながる子どもたちが日本の学校に通うとなると言語の違いなどでうまく子どもたちと打ち解けにくいのではないかと思います。そのような言葉の壁を乗り越えるためにもコミュニケーション能力が欠かせません。そのためには、自分がよりコミュニケーション力を身につけ、接することで、子どもたちにもコミュニケーションをとることの大切さを伝えていきたいと思っています。

もうひとつは指導力です。のびのび楽習塾では「外国につながる子どもたち」に勉強を教えているため、言葉の壁を乗り越えなければなりません。私の担当している生徒も学習する姿勢はあるのですが、文章問題になってくると漢字ばかりで理解することができなくなり、問題を解くことをあきらめてしまうと言っていました。

子どもたちには、すぐにあきらめるという意識を持ってほしくありません。そのためにはよりわかりやすい説明が必要になってくると思います。これからも子どもたちにわかりやすく教えるためにもその内容の復習をしっかりとやり、楽しく勉強ができるようにしたいと思います。

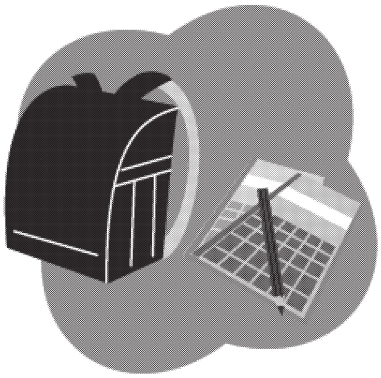
支援の方向と目標

工学部　３年　勝俣恵梨奈

私はのびのび楽習塾で主に中学３年生の理科と数学を担当しています。４月の時は受験へ向けて中学１年の時の復習から勉強を始めました。しかし、実際に勉強をしていく中で受験の勉強を中心にする生徒より、その前段階の復習が必要だと感じました。のびのび楽習塾では進路係を作り、受験へ向けて勉強を進めていく予定でしたが、入った高校に通っても困らない基礎知識を増やしていくことの方が大切ではないかという話が出て、私もその方がいいと思いました。そのためにまずは学校の勉強の支援（具体的には宿題）を第一にし、それぞれの子どもに必要な部分の復習を行いました。

後期には、「生徒・児童間のつながりをより良くする」という目標を立て、活動しました。私はその目標へ向けてある方法を行いました。それは、勉強の間のおやつの時間にあまり話をしない子ども数人に共通の話題を投げかけ、話をする機会を作ることです。これを行ってみて、生徒・児童同士も今までより積極的に話しかける様子を見ることができた気がします。

４月の頃から支援の方向を少し変えて勉強を行いましたが、のびのび楽習塾での子どもたちの様子は変わらず、楽しく勉強を行っています。これからもこの雰囲気を保つことができるように、ボランティアを続けて行いたいと思います。



子どもたちを教えて見えてきた課題

工学部　３年　西尾真由子

私が、外国につながる子どもたちの学習支援をするのびのび楽習塾に参加し始めてから、半年以上経ちました。回数を重ねるごとに子どもたちとたくさん話ができるようになり、通学途中に偶然出会っても話しかけてくれる子もいるようになりました。勉強面でも、生徒１人１人の得意なこと・苦手なことが少しずつ見えてきた気がします。子どもたちの様子が分かってきた分、私の課題も出てきました。

後期の活動で特に印象に残っていることがあります。子どもたちを教えていく中で、一度、数学の先生が見学に来てくださいました。先生とは少しの時間でしたが、数学の教え方や外国につながる子どもたちに教えることの難しさについてお話することができました。

教わったことの１つに、「１コマの中で絶対に教えたいテーマを１つ（または２つ）決めて行う」ということがあります。私が比例の範囲を教えたときに、選択肢の中から比例の関係になっているものを選ぶ問題がありました。各選択肢の中には、図形の面積を求める式や速さと時間から距離を求める式を立てる問題などがあり、私はこれらの選択肢を全て細かく説明してしまいました。生徒は１つ１つにうなずいて説明を聴いてくれましたが、授業が終わった時には、たくさんの内容を詰め込みすぎて混乱しているようでした。今後は、このようなことがないように、授業の中で理解してもらいたいことを確認して、それを意識して行っていけるようになりたいです。

もう１つ、計算が苦手な子どもたちには、タブレットなどを使ってゲーム感覚で行うと効果的であったことも教わりました。実際に、タッチペンの跡でぼろぼろになってしまったiPadも見せて頂きました。数学と情報の教員免許取得のために勉強をしている私にとって、とても興味がもてました。簡単にタブレットやアプリを用意することはできませんが、１００マス計算など工夫次第で楽しくゲーム感覚で出来る方法もたくさんあるので、取り入れてみたいです。

外国につながる子どもたちの多くは文章問題が苦手です。問題の解き方の前に、問題文の意味がわからない場合が多いです。その時は、具体例をたくさん示すことが良いことも教わりました。先ほどの比例の例だと、値をたくさん代入すると、子どもたちにわかりやすいそうです。子どもたちに教えていると、上手く説明できていない部分がたくさん出てきます。「のびのび」に来ている子は、みんな積極的で、わからない部分をはっきりと言ってくれます。この恵まれた環境で試行錯誤しながら、わかりやすい教え方を見つけていきたいです。

変わるものと変わらないもの

経済学部　３年　津輕範行

今期に担当している子どもは内気な性格のために自分から何かを話すということが少なく、私自身も、口数が多くありません。似たような性格の二人が一緒に勉強するという状況が生まれました。最初の頃はあまり会話が弾むこともなく、挨拶と勉強をして終わっていました。しかし、回を重ねていくと子どもが自分から挨拶をするなど、表情もよくなってきました。

子どもに変化があった点は、自分で勉強したいことを言うようになったことです。科目名だけでなく、その科目のどのようなことについて勉強したいのかを言うようになりました。また、家でも勉強したのかなと思わせるくらい以前勉強したことを覚えていたので少しは勉強に対する抵抗が減ったのかなと思いました。

勉強について見ると、今期も前期と同様に１コマだけ、つまり１人の子どもとだけ勉強をしています。教え方も解答と一緒だから「正解」で終わるのではなく、なぜそのようになるのかなどを子どもが考えるようにしています。前期と何が変わったかといえばこれといって何も変わっていないのが現状です。より良くしようと考えていないのではなく、良くするために結果的に変わりませんでした。私が今行っている勉強のやり方では、子どもが言葉にしないといけないために必然と会話をしなければなりません。そのことによりその子と勉強前や後にも少しずつ会話が弾むようになりました。

それ以外のことで見ると、レクリエーションの頻度が以前よりも増えました。これにより支援者と子どもとの交流だけでなく、子ども同士の交流の機会も増えることになりました。これは支援者と子どもたちとの良い交流の場になっていると感じます。

今期も、「いつも通り」を心掛けています。これは、普段から行っている、より良くなるように取り組むことを意味しています。また、この言葉によって落ち着いて勉強などに取り組むことができます。慌てたりするとできることもできなくなってしまうからです。落ち着いて取り組めている点は良いことですが、より良くなることに終わりはないのでこれからも活動に励んでいきたいです。

のびのび楽習塾で学んだこと

外国語学部　３年　伊藤伎恵

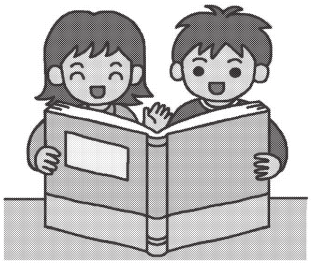
のびのび楽習塾に参加して半年以上が経ちました。だんだんと活動の感じをつかめるようになり、大変だと思う反面、楽しいと思える場面も増えてきました。参加したばかりの頃と比べ、私が「学び」を感じたことが２つあります。

１つ目は、子どもへの理解についてです。後期は担当の子どもが変わり、中学生から小学生の子どもたちを担当するようになりました。それまでは、彼らを担当する頻度は少なかったため、彼らとのやり取りを通して性格や特徴を知りました。

子どもの性格は様々で、自分から積極的に宿題を持ってくる子どもや自分からはあまり話さない子どもなどがいます。積極的に来る子には、授業のペースを握られないように、会話の中で勉強への集中力を戻すように諭す言葉をかけたり、授業の始めにその日の目標を示したりしました。また、自分の力で取り組めそうな課題には「お家でやろうね」などといった声かけの工夫をすることも一つの手段だとわかりました。一方で、あまり話さない子には、趣味の話を膨らませたり、Yes か No で答えられる質問ではなく、５W１Hを使って「どうしてそうなると思う？」「他にどんなことが言える？」といった聞き方をして距離を縮めました。

また、「わかった？」と聞くのではなく、自分が今説明したことをその場でもう一度自分の言葉で言わせるのも、知識がどのくらい定着しているかを確認する手段の一つだと、やっている中で気づくことができました。英語を教えていた時、定義を教える前にホワイトボードを使ってまず例として英単語をたくさん出しました。そして、これらの例からわかることは何かから始め、is, am, are の使い分けを帰納的に教えられるよう努めました。その成果として、子どもがその日の日記で「わかりやすかった」と書いてくれたのはとても嬉しかったです。のびのびでの授業を通して、学びや発見をもっと得られるような授業を作っていきたいと思います。

２つ目は、外国につながる子どもが直面している困難についてです。最も印象に残っているのは、数学を教えている時、定理がしっかりできているにもかかわらず、証明問題となるとわからなくなってしまうことです。その求め方を使って日本語に書き起こすところに問題を抱えているということがわかりました。できるようにしてあげるにはどうすれば良いか、考えさせられました。そこから学んだことは、書くという練習の大切さです。そのために、まず簡単で短い問題を解かせ、その解き方を日本語で書きおこす練習をするのが効果的なのではないかと思います。違う国のルーツを持っている彼らだからこそ、直面する問題を一緒に解決してあげ、子どもが学びを感じられるようにするにはどうすれば良いか、考え工夫することが大事であると実感しました。この活動を通して私自身の学びにも繋がったと思います。



言葉の壁を越えるためにできること

工学部　３年　安井大知

私がのびのび楽習塾に参加するようになってから感じたのは「言葉の壁」です。いくらコミュニケーションをとりたくても相手の言っていることが理解できなければ相手を理解することはできないし、相手も私たちの言いたいことを理解することは不可能でしょう。私が現在参加させてもらっているのびのび楽習塾に来る子どもたちは幼いころは外国で過ごしていて、現在は日本で過ごしているという子どもたちです。その中には日本語を話せてコミュニケーションをとることができる子どももいますが、全員がそうではありません。コミュニケーションをとることができない原因として、そこに恥ずかしさなどもあるとは思いますが、やはり一番大きな要因となっているのは「言葉の壁」だと思います。

私自身が体験した出来事でいうと、私は比較的早口であるため、日本語の「つ」と「す」の発音が外国の人には分かりづらいということを指摘されたことです。私はそれまで何気なく言っていたので、気にはなっていませんでした。また、ほとんど外国の方と関わるような機会がなく生活していたので、それを指摘されたときは少しショックでした。早口で聞き取りにくい言葉では相手は私の意図していることをはっきりと理解できませんが、それではコミュニケーションをとっているとはいえず、私が伝えたいことだけを伝え

伝えるという自己満足で終わってしまいます。

そこで私が学んだのは相手の目線に立って相手のものさしで接することの大切さです。「言葉の壁」を越えて子どもたちに勉強を教えることや会話をするうえで最も重要なことは、たとえ自分自身が理解していても決して相手が理解しているとは限らないからです。それを日ごろから念頭に置くことによって、子どもたちと接するとき、自然にふるまうことができます。さらに、コミュニケーションをとりやすくなりお互いに信頼関係が生まれ、ちょっとした質問があるときでも気軽に質問できるので、より良い学習環境を子どもたちに提供することもできます。

よく会話というのは「言葉のキャッチボール」だと言われます。私自身、のびのび楽習塾を通して多くのことを学ぶことができると共に、私自身の世界観が広がったと実感しています。話の冒頭から出てきている「言葉の壁」を越えるのはとても難しいことだと思いますが、実際はとても単純で、相手の立場に立って物事を考えることが大切だとのびのび楽習塾は私に教えてくれました。単純なことほど難しいものはないと私は思います。「単純なことを当たり前のことにする」ことこそ、これからの私自身の課題であり、それが「言葉の壁」を越える鍵になると思うので、そういう意識付けをして生活していきたいと思います。

子どもたちとふれあう

工学部　３年　恒賀聖司

私は今年の６月に母校の中学校に教育実習に行きます。教育実習に行く前に、実際に子どもたちとふれあい、教えるという経験を積みたかったので、のびのび楽習塾のボランティアに参加しています。

のびのび楽習塾には、日本出身の子どもだけではなく、外国出身の子どもや大人が来てくれます。そのため、様々な価値観を持った方たちとふれあうことができ、国際交流の場でもあります。

そのような環境の中で困ることはやはり、言葉の壁です。私が担当する外国出身の子どもは、日本の学校で勉強することが難しいようです。授業は日本語で行われ、周囲の人は皆日本人で、友達を作るのも大変です。そのため、その子は人とコミュニケーションをとることに少し抵抗があるように感じます。そのような子どもたちとどのように接していけば良いのだろうか。

私が心掛けていることは、とにかく明るく接することです。言葉は分からなくても、声の大きさや調子から少しでも私の気持ちを伝えられるように努力しています。また、その子どもの話をしっかり聴いてあげることです。そして、一緒に考え、共感するようにします。

最近では、私はその子どもの母国語に興味を持ち、あいさつ程度の単語を覚えました。授業で覚えた単語を使ってみると好感を示してくれました。やはり、子どもは自分に誰が興味を持ってくれることを期待しているのではないかと感じます。従って、私はその子の国の文化や言語に興味を持ち、勉強してみようと思っています。

最後に私の目標としては、私が担当する子どもがのびのび楽習塾を通して、人とコミュニケーションをとることの楽しさを知ってほしいと思っています。そして、その子が通う学校では、友達をたくさん作って、たくさん遊んで、もちろん勉強も怠らず、学校に行くことの楽しさを感じてほしいと思います。

子どもたちに寄り添う

外国語学部　４年　佐藤陽子

私がのびのび楽習塾の活動に参加し始めてから1年が経ちました。この1年間で勉強する子どもも支援する学生も増え、これまで以上に活気のある活動となっています。「以前は勉強に集中できなかったが、最近はきちんと学習に取り組むようになった」「今まで読めなかった漢字を書けるようになった」等、勉強に取り組む姿から子どもたちの成長を見ることができて、嬉しく思うとともに手ごたえを感じています。

前回のボランティア通信で活動の振り返りをした際に、課題として「子どもの理解」がありました。「生徒の言葉に耳を傾ける」「生徒を理解しようとする姿勢をもつ」など他の学生も書いていましたが、子どもの力を引き出したり伸ばしたりするためには、まず子どもに寄り添い、彼らを知ることが大切です。以前担当した子どもは、学習が定着するまで時間がかかり、ステップアップもゆっくりだったため、強化したいポイントと彼の興味を合わせて学習内容を考えることが大変でした。毎回来るものの表情が暗く下を向くことが多かった彼は、ただ時間が過ぎるのを待っているようにも見えました。そんな彼を見て「今日の学習は彼にとって意味があったのだろうか」と悩んだことも少なくありません。彼が何を勉強したいのか、何を求めているのか、考えても答えは見つからず、休憩時間の中で笑顔を引き出すことで精一杯でした。この時のことを振り返ると、私は彼を理解するための姿勢をもつことを怠っていたのだと反省しています。

のびのび楽習塾は学校ではないので、子どもたちが来ることは義務ではありません。しかし彼らは毎週来て勉強をしています。彼らのモチベーションを無駄にせずきちんと応えることができるように、我々は事前に準備をして充実した学習になるよう取り組まなければなりません。そして日々成長する彼らと共に、我々支援する側も成長していく必要があります。子どもたちに寄り添い、常に彼らの言葉に耳を傾けて、双方に意義のある活動になるよう今後更に精進していきたいと思います。

半年を迎えて

法学部　４年　中島慎介

のびのび楽習塾に参加してから半年が過ぎ、私は外国につながる子どもたちと楽しく、一緒に学習しています。学校の様子や最近の出来事などについて、子どもたちと話す機会が多くなりました。特に“おやつタイム”では、私は子どもたちとおやつを食べながら会話をして、楽しいひと時を過ごしています。これにより子どもたちの状況を少し把握することができ、お互いの関係も作れるようになりました。私はのびのび楽習塾に参加して、子どもたちの喜びを実感しています。

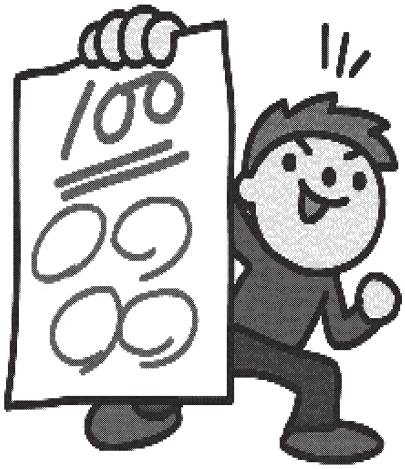
夏休み期間中、私は中学３年の生徒に対して、学校から出された社会のレポート課題に関わる支援をしました。私が「このニュースについてどう思った？」と生徒に尋ねてみると、「びっくりした」などの一言で返ってきました。その後生徒は、１つのニュースの要旨と感想を１時間以上かけてまとめました。このとき私は、難しいキーワードを多く言い過ぎたか、それともキーワードの意味を分かりやすく説明できなかったのか、それとも質問をせずにそのまま進行したのかと頭を抱えたことがありました。つまり長く時間をかけて、生徒とコミュニケーションを取っていく必要があることが分かりました。生徒に学校生活の様子や趣味などの話題に触れさせることによって、考える力や書く力が伸びるのではないかと思いました。

夏休みが終わった後の１０月、私は初めて中学２年の生徒に数学の学習支援を行いました。その生徒は静かな子どもで、学校の授業についていけないのが現状です。“学習タイム”の冒頭に私は生徒に簡単な自己紹介をしたり、生徒と学校生活や夏休みの思い出、趣味などについて会話したりしました。するとその生徒はかなり喜んで、私に声をかけてくれました。さらに私は母国語を使った簡単な会話や挨拶を、その生徒から教わりました。その生徒とコミュニケーションを少し取れていることを、嬉しく感じました。

このように外国につながる子どもたちとうまくコミュニケーションを取っていくためには、子どもたちの様子を把握していかなければならないことが分かりました。それを知れば、子どもたちと簡単な自己紹介や会話のやり取りができます。今後、私は３月までに子どもたちへの学習支援の仕方をしっかりと身につけ、お互いの関係をうまく作っていきたいと思います。

半年の振り返りと今後の目標

外国語学研究科　１年　鈴木惠介



私は昨年の４月からのびのび楽習塾に参加しています。あれからもう半年以上が経つのかと思うと、時間が流れるはやさが身にしみます。自分の授業が子どもたちの役に立っているのか、自分は何か変わることができたのか、成長できたのだろうか、と自問してみると、はっきりイエスと答えられないのが正直な気持ちです。

しかし、うれしいことはありました。私がよく担当する男の子が、来年の高校受験に向けて、熱心に勉強に取り組むようになったのです。その男の子は漢字を苦手としているのですが、毎週漢字の読み書きを一生懸命勉強しています。それだけでなく、自宅で毎日漢字のドリルを使って勉強するようになったのです。のびのび楽習塾に参加した当初は、ただ毎週の授業を行うだけで、そのような変化に気付く余裕がなかったのですが、最近は、子どもたちとだんだん仲良くなれてきたためか、彼らの成長を感じて、うれしく思うことがしばしばあります。私はこの半年で成長できたかどうかはわかりませんが、このような気持ちを持つことができたことは確かだと思います。

私はのびのび楽習塾での後期の目標を「子どもたちが仲良くなれる環境をつくれるように心掛ける」にしました。支援をする側の学生は子どもたちと仲良くすることができているのですが、子どもたち同士が話しているところをあまり見かけないので、そのような環境をつくるように心掛けたいと思いました。また、のびのび楽習塾には中学３年生が多く、今年度が最後の子どももいるので、それまでに出来るだけ子どもたちが仲良くできる機会をつくりたいと思いました。

しかし、そのような機会をつくることは簡単ではありません。のびのび楽習塾の授業は基本的に１対１で行うので、子どもたち同士が会話をする機会はだいぶ制限されてしまっています。目標は定めましたが、達成するための行動がなかなかできていないのが、私の現状です。

私の今後の目標は、引き続き、「子どもたちが仲良くなれる環境をつくれるように心掛ける」にしたいと思います。例えば、１時間目と２時間目の間のおやつの時間に子どもたちが話すきっかけを作れるようにしたいと思います。また、のびのび楽習塾では、レクリエーションを月に1回行っています。このような機会を利用することで、来ている子どもたちが仲良くできる環境をつくっていきたいと思います。

発行日：２０１４年２月１５日
発行場所：神奈川大学　教職課程支援室
TEL: ０４５－４８１－５６６１
FAX: ０４５－４１３－４１５４
E-mail: ttcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp

発行日　２０１４年2月１５日

青少年の居場所

目次:

継続することの大切さ 阿部由希	1
慣れと狎れ 渡邉省吾	2
児童から得たこと 神田祥佳	3
新たな活動で得た目標 松本力哉	4
はじめての挑戦 村岡優樹	5
青少年の居場所に参加して 佐々木秀太	6

「継続することの大切さ」

経済学部　３年　阿部由希

「青少年の居場所」に参加して８か月が経ちました。始めた当初は、自ら話しかけに行くことが出来ず、戸惑っていましたが、徐々に環境にも慣れ、積極的にコミュニケーションを取ることが出来るようになりました。小学生、中学生、高校生などはもちろん、大人や外国人、ハンディを抱えた人など地域の方々ともコミュニケーションを楽しむことが出来るようになりました。その中で、特に大きな変化をもたらしたのは、夏休みの合宿です。

夏休みに、小学生が入っているサッカーチームの３泊４日の合宿に参加しました。合宿では、大人１人に小学生が５～６人で１チームという形で、真夏の猛暑の中、サッカー漬けの毎日でした。私のチームは６年生がおり、その子を中心に１年生までのチーム全員が協力していました。洗濯や部屋の掃除、食事の準備などサッカー以外の子どもたちの様子を見て、児童が自立しようとしているのを感じ取ることができ、自分も見習うべきところだと思いました。また、日を増すごとに成長していく子どもたちの姿を見ることが出来たのは、とてもいい体験になりました。

合宿では、「ベアー」というニックネームを付けられ、より一層子どもたちとの距離が近づき、１日という時間を共に過ごすことによって関係が深まったと考えます。子どもたちだけでなく、参加していた社会人の方々ともコミュニケーションを通してよい関係づくりができる機会となりました。合宿前はお互いが少し気を遣って話していましたが、現在では、「由希、早くゴール組み立てろよー」と笑いながら言われることや、気を許しているからこそ出来る会話から、大きく関係性が強まった印象を受けています。

合宿を経て、大学の後期が始まり、青少年の居場所としてこれからどう活動していくべきかを再度考えてみました。そして、後期の目標を立てました。「子どもの表情に目を向け、そこから子どもの感情を読み取り、よりよい関係を持続させる」ということです。プレーしていてミスをした時の悔しそうな表情や、点を決めた時の嬉しそうな表情などを観察し、感情を読み取り、それを児童と共に共有し、一緒になって感じていくということです。これを続けることで、子どもと信頼関係を築くことができ、よりよい関係を構築することが可能であると考えます。

８か月が経ったことで、関係性については築けてきたと感じています。これからの活動をよりよい内容にしていくには、「持続させる」ことが重要であると考えています。最近では、新しいメンバーが増え、さらに活動が活発になってきています。これからは、その中で「自分」というものを子どもたちや社会人の方々に表現し続け、よりよい関係を維持して行きたいです。

「慣れ」と「狎れ」

経済学部　２年　渡邉省吾

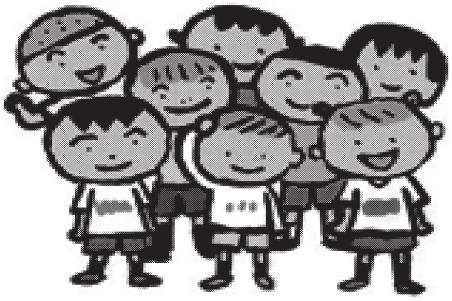
「青少年の居場所」のフットサルのボランティア活動を始めてから８か月ほどの時間が経過しようとしている。自分としては、すっかり溶け込めていると思う。共に活動に参加している神大生の先輩や、社会人のみなさん、そして一緒にフットサルをしている子どもたちが受け入れてくれたおかげでもある。「青少年の居場所」の活動とは、主に中・高校生世代の青少年が、安心して気軽に集い、様々な体験や交流を行うことができる場所として、横浜市が主導して設置している青少年地域活動拠点へ参加することである。

上記のとおり、中・高生や、それだけでなく、小学生・大学生・専門学校生、更には地域の社会人のみなさんとフットサルをしているが、まず社会人をはじめとした大人のみなさんと親しくしてもらい、その後小学生たちがじゃれてきてくれるようになり、最近では中高生たちも顔を合わせると挨拶をしてくれ、色々な会話もできるようになった。これは、自分だけの力ではないが、自分が数多くの活動に積極的に参加し、積極的に様々な人たちとコミュニケーションを取る努力をしてきた結果でもあると考えている。この経験はこれからの人生の様々な場面で活きてくると思うので、こういった場所は大事にしていきたいと思う。

ところで、最近私はこの「青少年の居場所」のボランティアをきっかけとして、小学生のサッカーチームのコーチをするようになった。そこでの活動を通して、縮まっていた小学生との距離がさらに近くなったように感じる。小学生が絡みにきたり、話しかけてくる回数が段違いに増えた。

そんなある日、私は高校時代の恩師の言葉を思い出した。他人間のコミュニケーションにおいて「慣れ」というものはとても重要である。「慣れ」ることで距離は縮まり、コミュニケーションも円滑に行われるようになる。しかし、これが時間をおいて「狎れ」にならないように気をつけなければならない。「狎れ」とは親しみ過ぎて礼を欠いてしまうことだ。要するに、「親しき仲にも礼儀あり」ということである。特に私と小学生たちは同級生ではない。これはとても重要なことだと思う。私たち大学生は、世間的にはもう子どもとしてではなく、一人の大人として扱われることが多いと感じる。そんな私たちは、小学生たちに社会的なマナー等を教えるという役目を果たすべきだと考える。社会人の大人の方たちよりも近い存在である私たちだからこそ強くそう思う。

これからも私はボランティア活動を続けていくつもりである。「慣れ」と「狎れ」。この２つの言葉の違いを心に留めながらも、子どもたちと楽しみながらボランティア活動を続けていきたい。



児童から学んだこと

法学部　1年　神田祥佳

私は、昨年の１１月から、「青少年の居場所」というボランティア活動に参加しています。この活動は、神大寺地区センターで小学生のバンド練習をお手伝いするものです。

一言にバンド活動のお手伝いと言っても、楽器演奏の経験がない私は演奏技術などのアドバイスはできません。しかし、この活動に参加することが貴重な経験であり、また教育現場において必要とされる知識や経験へのステップとなることを信じ、ボランティア活動の参加を決意しました。

地区センターでの、学校とは違うのびのびとした環境で、自ら好きな活動に没頭する児童たちを見て、私は改めて児童を見守る側の視点に立ち、物事を考察する重要さを実感しました。それは、コミュニケーションをうまくとれなかったことで気づかされたのです。友達としてではなく、少しでも教育者の視点をもち児童たちと触れ合いたいとばかり考えていたことで、気持ちに余裕がなくなり焦ってばかりいたことが原因でした。

しかし、時間が経つにつれ児童のほうから私に接してくれるようになりました。児童の純粋な笑顔や無邪気さに心を救われた私は、それまで抱えていた不安や緊張が全くなくなりました。私は、教科書や講義などで学ぶ知識はとても大切だが、ただその知識だけを頼りに行動していたら、児童相手や教育現場では対応することができないと思いました。それは児童たちと同じ目線に立ち、同じものを見聞きし、同じことについて考えることで信頼を得て、より心が通ったコミュニケーションをとれるのではないかということです。

またこの活動の中で、私が最も感心したことは、小学生バンドの完成度の高さです。小さな体や細い腕で、大きな楽器を一生懸命演奏する子、おなかの底から元気よく声を出して歌う子など、それぞれが真剣に取り組みながら成果を残し、みるみる上達していく姿は、今の私が児童から一番学ぶべきものでした。大学の中だけで勉学に励み、知識を増やすことだけが成長に繋がるのではなく、ボランティア活動や奉仕活動など学外での経験もとても大切なものだと、児童たちと関わるなかで強く実感しました。そして、私は未経験のドラム演奏を児童に教えてもらったことをきっかけに、バンドサークルでの活動もしたいと思っています。

今回、「青少年の居場所」というボランティアを通して、今まで全く接点の無かった児童と深く関わることができ、より一層教員への夢を叶えたいと思うようになりました。また「青少年の居場所」をはじめ、今後も継続的に幅広いボランティア活動に参加し、児童との関わり方や自らの成長にしっかりと結び付けていきたいと思います。

Page 4

新たな活動で得た目標

経済学部　１年　松本力哉

私が神奈川大学に入学してもう8か月以上が過ぎようとしています。私は入学して間もなく「GLOBAL YEN LEAP」というボランティア部に入りました。そこでは、ゴミ拾いをしたり、小さな子と鬼ごっこなどをして触れ合ったりなどの活動をしていました。前期も終わり、11月になったころ、体育の授業の終わりに先輩からフットサルを通して子供達触れ合ったりする活動があるということを話していただき、その時に出会ったのが「青少年の居場所」でした。

活動は小学校の体育館で行われています。まず、初めに思った印象は小学生だけでなく社会人の方など年齢層がとても幅広いということでした。私は、ボランティア部の活動などで小さな子と接することが多いことや、自分自身の弟や妹が小学生と小さいため、すぐに話せるようになるだろうと内心思っていました。しかし、1回目の活動ではほとんど小学生達と話せず、大学生の方々や社会人の方々とばかり話していました。１回目の活動で思ったことは、小学生達から話しかけてもらうのではなく、自分から積極的に話しかけなければ小学生が自分に心を開いてくれるはずがないということです。そして、次の活動では、自分より年上の人だけではなく小学生にも話しかけて覚えてもらいたい、仲良くなりたいという気持ちが日に日に増していきました。自分が、参加している方に話しかけてようやく初めてコミュニケーションというものがとれるのだと、関係を構築していくむずかしさを体感したような気がしました。

１月になり、私が「青少年の居場所」に参加して２か月がたちます。
私は、大学の講義が6限まであり、毎回遅刻での参加となっています。しかし、少しずつ子供達に話しかけることもできるようになってきました。私は出身が関西なので、小学生の子供達には「え、どこからきたの？」など色々質問されることなどがありました。まだ、名前を覚えてはもらえていないと思いますが、会話をすることによって、少しずつ親しめてきたのではないかなと感じています。また、子供達に名前を覚えてもらうには、自分自身がまず子供たちの名前を呼び始めるように心掛けてはやく親しんでもらえるように努力したいと思いました。「青少年の居場所」での活動では、これまでの私の経験では無かったような事がたくさんあります。この活動を通して、私自身も広い視野を持つことや、ここでの関係を大切にしていくという新たな目標をもってこれからも活動を続けたいです。

はじめての挑戦

人間科学部　1年　村岡優樹

昨年の10月後半から「青少年の居場所」の活動に参加させていただいてから2ヶ月が経過しました。怪我などで活動には中々参加できていませんが、既に色々な事を感じています。

子供達はみんな活動に積極的に参加する意欲がありますし、試合が終わるとすぐに次のチームの試合が始まり、掛け声なども聞こえてとても良い雰囲気でした。実際に活動を行う前に思っていた風景とは、まるで異なっていて、とてもこの活動が魅力的に感じられました。

また、初対面の子供たちや社会人の方々、大学の先輩に同学年の人たちと一緒に団体競技を行うのにはコミュニケーションがもっとも大切であると活動に参加して感じました。社会人の方や大学の先輩はとても気軽に話しかけてくれたり、活発な子達は「なんて名前なの？」とか「上手なの？」などから会話に発展していくので活動の輪に入る事ができました。

しかし、中には初対面の人と話すのが苦手な子もいました。自分も人とコミュニケーションをとるのが苦手なので、その子と仲良くなる事ができませんでした。自分から積極的に話しかけに行ったり、みんなが会話している所に入っていったり、この活動に参加してこれらの苦手な事を克服したいと思っていたのですが、実践することができませんでした。これからは、話せなかった子とも積極的に話していきたいと思います。

そのためには、高校でフットサル部に所属していたのを活かしてアドバイスなどができると思うので、そういったところから始めていきたいと考えています。

その他にも先輩方が実際に子供達と接しているのを見ているととても勉強になります。参考にできる部分もたくさんありますし、自分に足りない能力なので真似していきたいと思いました。特に子どもたちが「青少年の居場所」の先輩と話しているのを見ていると、みんな楽しそうに話していたりはしゃいでいたりしていて、自分もそこまで話せるようになりたいと思いました。

また、こういった環境でスポーツを行うのは初めての事なのでとてもいい刺激になっています。ここで学んだことを将来の夢である教師になった時に活かせるように、これからたくさんの事を感じて学んでいきたいと思っております。

Page 6

青少年の居場所に参加して

経済学部　１年　佐々木秀太

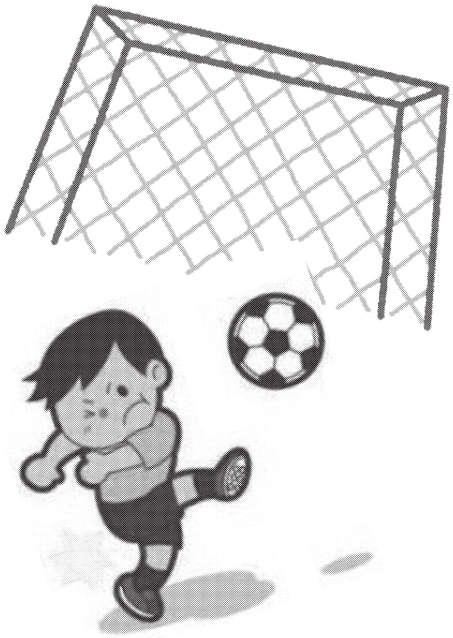
「青少年の居場所」のフットサルに参加して、第一に感じたことは、子どもたちは、ただフットサルをやっていれば自然と寄ってくると考えていたが、それは違ったということである。実際は、自分の方から歩み寄っていかなければ、子どもは心を開いてくれなかった。

そこでまず私は、フットサルに参加している人たち全員に話しかけるということを目標にやってみた。全員に話しかけるということは、なかなか難しかったが、多くの人々と話せることができ、少し馴染めた気がした。

自分は日ごろ子どもと接する機会があまりないため、どう接していいかわからなかった。そのためとてもぎこちない接し方だと感じた。そこで、「子ども」だからという考えを取っ払ってしまおうと考えた。自分以外の方々などの接し方を見ているともう少し気を楽にして接してもいいと感じた。

フットサルをしているときに子どもの表情などを見てみると、試合に勝ったり、いいプレーをしたり、シュートを決めたりすると、すごくうれしそうな表情をしていた。逆に負けたり、競り負けたりするととても悔しそうな表情をしていた。何事にも全力で楽しんでやっていると感じた。そこから自分も全力で何かに打ち込む姿を見習わなければならないと感じた。子どもは一人ひとりちゃんと個性があり、接してみないとわからないということを学んだ。

これから自分は、子どもと接する機会が多くなると考える。そこで、子供たちに対する接し方などを学んで、これからに生かせるように頑張っていきたいと考える。また、もっと子どもたちに積極的に話しかけていき、自分のことを覚えてもらえるようにしていきたいと考える。



発行所：神奈川大学　教職課程支援室

TEL:045-481-5661(内線4228)
FAX:045-413-4154
E-mail: ttcr-yokohama@kanagawa-u.ac.jp
URL:http://www.kanagawa-u.ac.jp/Teacher_tarining_course/jysp/